

パネル

〈日本仏教〉の探究

——近代における宗門の再編成と歴史記述——

オリオン・クラウタウ

近代仏教研究に取り組んできた研究者の多くは、伝統的な宗門の枠組みを乗り越える試みを、仏教が「近代化 modernize」するための不可欠の条件として捉えている。事実、明治維新以降、それまでの宗門にとられない存在としての「仏教」を構築する作業は仏者の基本的な試みのひとつであったことは否定できない。一方、近代の過程において、そういった試みが盛んにみられるからといって、「近代＝通仏教の時代」とまで定めてしまうのは不適切であろう。「通仏教」は叫ばれるようになって、仏教界の主流は宗派意識が以前にもまして強い、という指摘も一部の近代仏教研究者にされている。そうであるならば、「通仏教」がひとつの理想だとされた近代なる時代のなか、宗派性は如何に保たれたのかを考えることは、実態としての近代仏教をめぐる更なる理解につながるのではないか。こういった議論に貢献する試みとして、報告者は今回、明治期に公刊された『日本仏教史』なる題目を掲げる一連の書物に焦点を当てる。つまり本報告は、明治期において、既成の宗門を超越する「日本仏教」という旗の下に、何が語られたのかを考察するものである。

報告者は田島象二『日本仏法史』（一八八四年刊）、大内青巒

『日本仏教史略』（一八八四年刊）、三宅雪嶺『日本仏教史 第一冊』（一八八六年刊）、島地黙雷・生田得能『三国仏教略史』（巻之下、一八九〇年刊）、加藤咄堂『日本仏教史』（一八九二年刊）、相澤祖明・渡邊重麟『日本仏教歴史』（一八九五年刊）にまず焦点を当て、この時期の「日本仏教史」に、次のような特徴を見出すことができた。すなわち、①「日本仏教史」は、僧侶が担うような言説ではなく、むしろ在家信者などによる営みである。②一部の著作に、皇室を意識する傾向が窺える。③「編年体」という伝統的な形式からの離脱が強調される。大まかな傾向は以上三点であるとはいえ、この時期の「日本仏教史」はその内容も、語る目的も、多岐にわたるものであると言わなければならない。

しかし、一八九四年に公刊される『仏教史林』とその同人の学術的営為により、「日本仏教史」の記述に新たな方向づけがなされる。例えば、村上専精・境野黄洋・鷲尾順敬『大日本仏教史』（一八九七年刊）や、専精『日本仏教史綱』（一八九八―九九年刊）は主に、各宗の成立・教義の概要・宗祖の伝記」という内容により構成されている。専精は、「各宗綱要」や「高僧伝」といった宗門の伝統的な語りの形式を、「日本仏教史」に対して試みたようにも見る事が出来る（明治二十年代までに氾濫する「各宗綱要」一連の著作は、専精がその「日本仏教史」的な営みを始めるとほぼ同時期に廃れることも関係しているであろう）。それまで宗門人の自己主張として利用された語りは、東京帝国大学の講壇に立っていた専精により、アカデミズム仏教学の世界に入り込む。専精以降、「日本仏教史」

は各宗の教理と高僧の事業を語る場へと変わり、「日本仏教史」を語るのと、各宗の独自性を主張するのが、同じ事柄の両面となる。

より厳密な検証が必要であろうが、まず次のように結論することが可能なのではないか——僧侶であり、アカデミズム官学の頂点に立った村上專精は、宗門を重視するような語りを「日本仏教史」の枠組みに行い、かかる作業により、彼は宗門の欲求を満たすと同時に、官学的な側面も満たすことが出来た。各宗門を「日本仏教」として語りなおし、その新たな構築物に「歴史」を与えた村上の営みは、この列島の仏教界が近世から近代へと再編成される重要な段階を意味するものであろう。

パネルの主旨とまとめ

西村 玲

従来の日本仏教史の研究においては、古代と中世が日本仏教の精華とされ、鎌倉新仏教が研究の主たる中心となる一方で、近世・近代については中世からの長い衰退の時期とみなされてきた。近世は、仏教勢力が寺檀制度によって幕藩体制の一翼を担うことにより、僧侶が墮落した時代とされた。近代は、神仏分離と廃仏毀釈が僧侶の奮起を促したことからは始まって、明治三十年代における清沢満之の精神主義によって、仏教思想の近代化が達成されたと考えられてきた。この見方は、ながらく日

本仏教史の通説であった。

この通説に対して、主として歴史学と宗教学の分野から、見直しが進められてきた。まず歴史学においては、一九七〇年代における黒田俊雄の顕密体制論によって、新仏教を中心とする中世仏教像は根幹的に改められた。黒田によって、新仏教に合理性や近代性を見出す近代主義的な仏教史観の見直しが開始され、現在にまで至っていると言えよう。近世史においては、一九九〇年代からの高埜利彦らによる身分的周縁論により、民間宗教者の社会的な分析が可能になり、近世における仏教の新たな意義が明らかになってきた。

一方、宗教学では、一九七〇年代に進展した国家神道の研究に加えて、それに続く新宗教の研究において、近代における仏教の大きな役割がはっきりと認識された。二〇〇〇年代に入ってから、それらの研究の達成と問題提起を引き継ぐ形で、さまざまな視点から近代仏教の研究が精力的に進められている。

近代仏教の研究が進展するにつれ、従来の古代・中世仏教像は、近代に見えられてきたものでもあり、近代仏教によって構築された側面が明らかになってきた。また近代仏教は、歴史的にヨーロッパ・アジア・アメリカなどと深く関わっており、一國史観では捉えきれない性格を持つ。近代仏教は、現在の我々の仏教認識を直接に創出してきた点で、本質的にトランスナショナルな性格を持つ点で、歴史的に特殊な位置にあるといえる。

本パネルは、歴史学・宗教学・思想史学という各人の専門分野において、こうした研究史を引き受けると同時に、近世から